



「第二次日本経穴委員会」便り

～第47回 経穴部位国際標準を普及させることに力を注ごう!～

第二次日本経穴委員会・作業部会委員 さかぐちしゅんじ
坂口俊二

ルーツをめぐる中韓の舌戦激化

大韓韓医師協会(以下、韓医協会)は6月18日、『WHO STANDARD ACUPUNCTURE POINT LOCATIONS IN THE WESTERN PACIFIC REGION』(以下、『WHO版』)の出版行事で、「WHOが公認した361個の経穴の99%近い357個が韓国の韓医学における経穴の位置に従ったものだ」と指摘し、韓国の伝統医学の安全性と信頼度が国際的に評価され、事実上、韓医学が鍼灸術の国際標準となったことを表明した。

この報道には中国側がすぐに反応した。7月4日の中国国営・新華社通信によると、今回の国際標準化の中国側専門家の1人で、中国中医科学院鍼灸研究所の黄龍祥副所長は、こう主張した。

「361個の経穴の位置はほぼ100%が中国の基準に従ったものだ。359個は中国の経穴の位置と全く同じだ」

これが論争の始まりである。

WHOもすぐに動き出した。「人民網日本語版」によると、2006年11月1日、日本のつくば市で国際会議を開催し、中日韓三国の代表は鍼灸学の古典著作である中国の「鍼灸甲乙経」を基礎とし、国際標準化を実現することで一致した、

としてWHO伝統医学協力センターのダニエラ博士は「WHOはつくば会議の前にも多数の経穴の標準を明確にしており、その90%は中国の専門家の案を採用している。中国の鍼灸は国際的に公認された地位を確立している」と強調した。

一方、韓医協会の報道は、韓国国内でも波紋を拡げることとなった。中国ニュース通信社「Record China」によると、同協会下部組織の医療一元化特別委員会はメディアを通じて「同協会の発表は歴史事実と明らかに違う」「韓国独自の経穴部位ではなく中国から伝わったものがほとんどだ」として、間違いを認め正式に謝罪するよう求めた。しかし、同協会は「言い過ぎた」ことは間接的に認めたが、これについての謝罪は拒否した。

さらに、同協会の関係者は、「中国も『中国医学の基準が国際標準として採択された』と、メディア宣伝をしたため、それに刺激された」と述べたうえで、こう付け加えた。

「標準案をまとめる過程では中国文献に沿った伝統的な方式ではなく、確かに韓国の解剖学的基準が根拠になった」

一部報道では、WHOは一連の発言に関して韓国側に抗議し、非公式であるがすでに中国側

に謝罪しており、詳細について中国国内で記者会見を開いて説明するとしている。

では、中韓の専門家とともに議論を重ねた日本側の反応はどうだったのか。当然、一連の報道は第二次日本経穴委員会（以下、経穴委員会）にも伝えられ、多くの鍼灸学関係者から韓国側に抗議すべきとの意見も寄せられるなか、6月26日に経穴委員会作業部会でのメーリングリストで、形井委員長は次のようなコメントを出した。

「経穴委員会の経穴標準化に対する姿勢と随分異なるものを感じます。この認識の仕方の違いは、目くじら立てればすぐに韓国側に抗議するに値するものと思います。しかし、そのような認識の仕方はいつか客観的な事実で正されると考えて時期を待つのか……。でも、それまで待つと、ことは次の段階に行ってしまうかと思いますが」

結果的に日本側は静観姿勢を取り、その後、中国側が上述のようなコメントを出した、というのが一連の経緯である。

大事なことは国際標準を普及させること

韓医協会のコメントにあったが、中国は2007年1月26日に「2006年中国薬十大新聞掲載」を発表し、その中の1つに「経穴部位国際標準制定」を挙げ、2006年11月1日のつくば会議での国際標準について、361穴中360穴は中国案であったと報じている。これが伏線となり、今回の論争が激化したものと考えられる。

しかし、中韓双方の意見そのものが正しいとは言えない。日中韓で非公式に議論してきた3年間の内容をもっと大切にしてほしいと、日本側は考えている。1989年のジュネーブ会議以降、

各国の思惑が交錯し全くと言っていいほど進展しなかった経穴部位の標準化がようやく実現したのである。これの普及にもっと全力を注ぐべきではないだろうか。

現在、経穴委員会は、『WHO版』の日本語版発刊に向けて最終作業に入っている。同時に、教科書の改訂に向けて東洋療法学校協会、日本理療科教員連盟の専門家との最終作業も行っている。これらはもちろん、国際標準の内容を教育にいち早く導入し、普及させるためである。中韓とは異なり、国定教科書がなかった反省に立っているものであるが……。日本には、まず足元をしっかりと固める必要があるように思う。

『WHO版』の経穴図に誤植が発覚！

『WHO版』は、現在、日本には300冊あまりが頒布されているが、7月上旬、購入者から、200-201頁の、陰包（LR9）・足五里（LR10）・陰廉（LR11）の各図の骨度スケールの下端部の位置が「膝蓋骨下端」になっていることが指摘され、誤植が発覚した。実際は骨度法では、恥骨結合上縁の高さと「膝蓋骨上縁」の高さを18寸としている。

これについてはWHO/WPROからの連絡を待たなければならないが、日本語翻訳版と教科書についてはすでに修正がなされている。このようなことはないに越したことはないが、もしお気づきの点があれば、経穴委員会のホームページ（<http://point.umin.jp/>）までご連絡いただければ幸いです。

〒590-0482 大阪府泉南郡熊取町若葉2-11-1
関西医療大学)